

長期間の口腔管理が齲蝕の再発に及ぼす影響

○宮川尚之, 松元一生, 高裕子, 若松美咲,
西田茉央, 中島麻莉菜
(医療法人まほうつ会みやかわ小児矯正歯科)

【目的】長期にわたって継続的口腔管理を受けている小児と、口腔管理を中断しがちな小児の齲蝕再発率と新生齲蝕数を比較する。

【対象と方法】対象者は初診時年齢が4歳から7歳で、初診時に齲蝕が認められ、治療を完了した小児88名。継続群：治療後継続して5年以上通い続けた小児46名。中断群：治療後口腔管理を半年以内に中断し、その後5年以上断続的に来院した小児42名。両群の齲蝕再発率、再発までの期間、齲蝕再発本数、新生齲蝕本数（乳歯・永久歯）を比較検討した。

【結果】1.齲蝕再発率は、継続群では再発ありが63.0%、中断群78.6%であった。2.再発までの期間は継続群では平均24.9ヶ月、中断群では平均27.0ヶ月であった。3.齲蝕再発本数は継続群では3.7本、中断群では平均3.8本であった。4.新生齲蝕本数は乳歯では継続群では1.0本、中断群では平均2.7本であった。永久歯では継続群では0本、中断群では平均0.2本であった。

【考察】今回継続管理群と中断群を比較したが、傾向として再発者が中断群において多い傾向を示した。再発までの期間は継続群の方が短かったが、これは定期健診で再発の徴候を早期に発見できた事によるものと考えられる。

また、継続的管理で乳歯齲蝕の再発は防げなかったが、永久歯の新生齲蝕は予防出来ると考えられる。

【文献】

- 1) 高裕子、他：「口腔衛生に関する指導効果の判定 ～第1報:保護者の歯科知識の比較～」小児歯科学雑誌, 51(1) : 126-126, 2013.
- 2) 若松美咲、他：「口腔衛生に関する指導効果の判定 ～第2報:患児の歯科知識の比較～」小児歯科学雑誌, 51(1) : 127-127, 2013.

幼児期のう蝕の有病者率の経年変化

○松岡奈保子, 柏木伸一郎, 西本美恵子, 岩男好恵, 久保田祥子, 山本未陶*

(NP0法人ウェルビーイング, *福岡歯科大学・口腔保健学講座)

【目的】

幼児期のう蝕の有病者率は高く、有病者率がカリエスフリーの割合をしのご状態が継続していたが、近年カリエスフリーの増加は顕著で、有病者率とカリエスフリーの割合は逆転している。その経年変化の実態と罹患者の生活におけるカリエス罹患のリスクについて調査したので報告する。

【対象と方法】

対象は福岡県内の8園（保育所または幼稚園）に通う3、4、5歳児の1993年～2004年に実施された定期歯科健康診断結果よりカリエスフリーの経年変化を明らかにした。2004年に実施した自記式質問紙調査により、乳歯のう蝕発生に関連する要因を分析した。

【結果】

3歳児のカリエスフリーは1993年は40%以下であった。1999年には49%、2004年には65%にまでアップした。4歳児のカリエスフリーは30%以下であったが、35%→60%にアップしている。1993年、1999年ではカリエスフリーよりう蝕を1～4本持っている子の割合が全体で1番多かった。5歳児のカリエスフリーは15%→29%→45%と変化し、2004年以前は、う蝕を5～8本持っている子が一番多かった。

2004年に実施した自記式質問紙調査では年齢間で有意差がみられた行動のうち、歯磨剤の使用は低年齢ほどできていなかった。お菓子類は子どもの手の届くところに置かない、および仕上げ磨きの実施はともに保護者の育児行動であり、年齢があがるほどしていなかった。

【考察】

全ての年齢におけるカリエスフリーの割合が高くなった背景について、明確な理由をあげることは難しいが、自記式質問紙調査の年齢間の保健行動の比較により「フッ化物の利用」が影響している可能性が示唆された。